

出席者：佐野教授、谷、橋本、新木、青木、深野、桑原、
岡田、田中、山口、唐露、岡部、杉山

哲学的問い；衝動とは何か（唐露）

- ・ 分別に分かれる以前に真の自己からでるもの（佐野教授；以下、S.Pr.）。
- ・ 西田先生の衝動としては、下記を示された（S.Pr.）。
意志の起こるには、その方向を定むる肉体的、精神的素因が必要で、これは意識の上には衝動的な感情として現れる。（中略）これは動機とも言え、目的観念を伴う。これで意志の形が成立するので欲求と名づけ、そのうち最も有力なものを、決意という（3-1-2）。
- ・ さらに欲求に関連して下記を示された（S.Pr.）。
我々の欲望・欲求は説明し得べからざる直接経験の事実であるのみならず、反って我々がこれによって実在の意志を理解する秘鑰である（3-4-4）。
- ・ これらより「衝動」というものを理解するには深い意味でしかとすることはできない（S.Pr.）。
- ・ 加えて下記も示された（S.Pr.）
すべてに意識現象はまず全体が一活動として衝動的に現れたものが矛盾衝突によってその内容が反省せられ分別せられたのである（4-4-2）。
- ・ 人間は反省することが大切であるが、なぜ反省して迷うのかという；
反省することによってその衝動が何かということになり、真の神が自らその姿を現すためである。つまり大いに神を見失うことによって神を見ることができるのである（S.Pr.）。

4-4-3（当日のところに入る）

- ・ 元来…、とあるとそれは純粹経験の話である（S.Pr.）
- ・ ゲーテの言う「自然は核も殻ももたぬ」…の核は統一力、殻は分化のことである（S.Pr.）。
- ・ 直接経験の事実においては、神はすなわち世界、世界はすなわち神である（西田先生）。
- ・ ゲーテの詩で、今ここで専念している人が神に接している（S.Pr.）。
- ・ 神すらも失った所に真の神を見るのである（エッカルト）が、発展の必然的過程として実在体系の分裂をおこす。すなわち反省である。ここにおいて一方に神あれば、一

方に世界あり、彼此相対し物々相背く様になる。そしてアダム、エヴの昔ばかりではなく、我々の心の中に時々刻々おこなわれている。衝動に対する反省は深き統一に達する途である（西田先生）。

- これは何だと思うと人間となり、悪の始まりとなる（S.Pr.）。
- 善人なお往生す…について；
どうにもならない事を人間は肯定なかなかできない。ただ一点、自分を自ら信じることしかできない。（S.Pr.）。
- 衝動に対して反省が起き、失樂園に出る(神を見失う)のであるが、この中で神にまみえるのである。
衝動だけの動物など、神を失ったことのない者は神に会うことはない。自分の樂園にとどまっているのみである。
分別をもって自分でなんとかできると思っている人は善人ではあるが、神より遠いところにいる。悪人と気づくことによって、神に近づくことができる（以上、S.Pr.）。

哲学的問い；

- 偽善はよくないことなのか。自分では善行のつもりでも、もしかしたら偽善かもしれないとの思いが脳裏をよぎったときは、どのようにすればいいのか（偽善かもしれないことは、しない方がよいのか。あるいは、してはいけないことなのか）。
- かたや、紛れもなく偽善でない善（真の善？）とはいかなるものか（どのような形でありうるのか）。
- また、現実にはどのようにして両者を区別したらよいのか（できるのか）。